

茜は空を見上げていた。津軽海峡の空は、大きなホウキで雲をなぎ払ったように、すっきりとしていた。周りを見回すと、遠くに船影が一つ二つ小さく見える。

津軽海峡の真ん中、海の上。

茜はライフジャケットをつけて、夏の日差しを浴びながら、ぷかりと水面に浮かんでいた。先輩と二人で、ようやくここまで来た。驚いたり、笑ったり、怒ったりした日々が風のように頭の中をよぎっていた。

茜が水泳を始めたのは、兄の影響だ。飽きっぽい兄に誘われるまま、スポーツ、ピアノ、園芸、ラジコン作り等々に次々と手を出し、器用な茜はどれも兄より上手にこなした。大半は兄にならって尻切れトンボに終わったが、その中で茜を長く魅了したのは、水泳とモンスターだった。モンスターは切れ込みのある大きな葉が特徴的なツル性植物で、ぐんぐんと力強く育つ大きな葉っぱに、茜は元気をもらえるような気がしていた。茜はモンスターの鉢植えをよく手入れし、葉はいつもつやつやと堂々とした姿を保っていた。

水泳が好きなのも似たような理由で、初めてクロールを習ったときに、腕のひとかきでぐんと前に進む感覚が気持ちいいと感じたのだった。中学校で水泳部に入った茜は、早朝や休日だけでなく、時には夜のプールに忍び込んで練習した。モンスターが育つようにどんどんタイムが伸び、三年生のときには、あと一步で全国大会に届くほどの好成績を収めた。

茜は高校でも水泳を続け、期待の新人ともてはやされたが、実際には華々しい結果を出したのは、同年の紗英だった。中学の大会では幾度となく顔を合わせており、いつも茜の圧勝だったが、それが一年足らずで逆転した。

茜も紗英も真面目だった。二人とも旧家の家訓を守るように、練習を休まず、顧問の教えに忠実に従った。部活が終わった後にも一緒に走り込みした。

「走るスピードで泳げたらいいね」

「いつそ、水の上を走ったら」

ランニングしながらのたわいのない会話が茜は好きだったが、同じ練習をしても、茜と紗英の差は開く一方だった。茜は次第に焦りを募らせ、焦れば焦るほど空回りした。茜はレギュラーの座もあやうくなり、そのことを顧問から告げられると、反射的に退部を宣言した。

「うちの家計だと浪人や私立は厳しいので、早めに受験勉強を始めたいんです」

半分本当、半分嘘の言い訳だった。顧問は黙って茜の意思を尊重したが、紗英は違った。茜に最後まで部活を続けるよう詰め寄った。「茜がいたから頑張れたんだよ」その言葉は、茜をいつそう惨めにした。

茜は水泳にかけた情熱を、そのまま受験勉強に注いだ。今までの勉強量が足りていなかったこともあって、成績はおもしろいように上向いた。モンスターは再び夏の勢いを取り戻した。憧れにすぎなかった難関国立大学も、年末の模擬試験では合格の可能性が出てきた。そんなとき、紗英も同じ大学を志望していることを人づてに知って、茜は背中にざわつきを感じた。

センター試験が終わり、紗英が早々に難関国立大学に願書を出した一方、茜は迷っていた。茜と紗英の総合点はほとんど同じで、合格の可能性は半々。茜は出願先を決めるのを先延ばししながら勉強時間をぎりぎりまで増やしたが、頭には何も入らなかった。また空回りし始めたことに自分でも気づいていた。出願期限の直前、「浪人や私立はダメだからね」という母の言葉に、茜はかえって気が楽になった。茜は第二志望の地元公立女子大に出願することにした。第一志望に比べれば、足元にも及ばないどころか地面に埋もれるくらいの知名度だったが、茜の家から通える唯一の大学だった。家計への負担の観点からそれが一番いい、茜はそう納得した。

茜は大方の予想通りに女子大に合格し、紗英は大方の予想を裏切って難関大に合格した。大学の合格発表後、紗英が茜の家を訪ねてきたが、茜は居留守を使った。割り切ったつもりでいても、「おめでとう」なんてとても言えそうになかったし、それ以上に「おめでとー」なんて言われたくなかった。茜は思い立ったように、部屋の大掃除を始め、立派に育っていたモンステラも捨てることにした。それから一週間ほど経って、家族旅行中の紗英から英仏海峡のポストカードが届いた。以前、紗英がランニング中に「いつか二人でオーシャンズセブンを横断泳しようよ」と言っていたのを茜は思い出した。オーシャンズセブンは、オーブンウオータースイマーが憧れる世界七大海峡で、英仏海峡はそのひとつだった。茜はそのポストカードを引き出しにしまった。

女子大は茜の想像以上に華やかで、入学手続きのときには講義棟の中庭で学園祭の出店のように各部活やサークルのテントが並び、在校生がノルマをかかえた営業マンのごとく必死で道行く新入生を勧誘していた。茜は当分スポーツをするつもりはなく、お気楽な文化系サークルに入って、青春を謳歌しようと決めていた。文化部のピラをいくつかもらった帰りがけ、茜は端のテントの「工作部」の

看板に目が止まり、テーブルに並んだラジコンや自作のパソコンの筐体に足を止めた。奥では一人の女子大生が、素人目にも危なっかしい手つきでハンド付けをしていたが、茜の視線に不意に顔を上げた。周囲のキラキラした女子大生とは、一周半ぐらい方向性が異なり、漫画のような厚いレンズのメガネをかけ、化粧つけはなく、髪はボサボサだった。目が合ってしまった茜は取り繕うように「すみません！ビラをもらっていいですか？」と言うと、「ご自由に」と彼女は短く返して、また作業に戻った。茜はテーブルの上のビラを一枚ひったくって、足早にそこから離れた。

入学後、誘われるまま、茜は軽いノリの文化系サークルの食事会にいくつか参加したものの、女子大特有のキラキラした雰囲気についていけないかった。もう少し地味なものに狙いを定め、茜が未経験の二つ、美術部と落語研究会を見学することにした。体育館の隣にある文化部の部室棟は四階建てで、美術部は二階、落語研究会は四階に部室があった。茜はまず美術部を訪ねたが、人の気配はなく、あきらめて四階まで階段を上りきったところで、思わず「あっ」と声を上げた。共用流し場で、一人の女子学生が手を水に浸していた。工作部のあの人だった。相手も茜に気付き、早口で言った。

「あ、見学？そこ入って。手を火傷しちゃって、もう少し冷やすから」

茜はあの危なっかしいハンド付けを思い返して納得した。他の部の見学だと訂正するのも面倒で、言われるまま工作部の中に入った。室内にはラジコンぐらいの大きさの、どういう動作をするのかはわからない自作機械が、博物館の陳列物のようにズラリと並んでいた。茜が物珍しそうに室内を見回していると、流し場から戻った彼女が言った。

「あなた、なにかスポーツをやってた？」

「水泳をやっていました」

「うん、合格！」

茜には何がなんだか分からなかったが、彼女はかまわず続けた。「私の名前はマシロ。百千万の方に、代表の代で、万代。名前じゃなくて苗字ね。あなたは？」

茜が名乗ると、万代は「茜さんね」と確かめるように言ってから、不敵な笑みを浮かべた。

「水の上を歩いてみたくない？」

それは茜にとって最上級の殺し文句だった。

万代の説明によれば、工作部は優秀な学生が集まる部で、OGは各界で活躍しているという。この春卒業生が去って、部員は現在、部長の万代一人だけ。入部には部長の許可が必要だという。部のモ

ットーは機械のイノベーションで、現在、小型水上機を開発中で、コードネームはヴス(VUSS)。小型水上機の英語はSmall Surface VehicleをSSUVと略し、逆から読んだもので、「ブスじゃなくて、ヴだからね、ヴ」と万代は念を押した。ヴスの開発は市販のドローンを改造することで進められてきた。

「ドローンって、人が乗れるんですか？」

「最近の製品は安全性を第一にして、だいたいリミッターがついてる。つまり、百パーセントの本気を出していいわけ」

万代は早口で説明を始めたが、茜には技術的な話はほとんど理解できなかった。

「つまり、市販品でも手を加えたり組み合わせたりすれば、人が乗れるってことですか？」

万代の目がメガネの奥でいたずらっぽく光った。

「試しに乗ってみる？」

ヴスの試乗は、人のいない夜の大学のプールで行われた。ヴスは水泳のビート板に大きさも形もよく似た、厚い板状の機械だった。万代がヴスの電源を入れてプールの水の上に置くと、ヴスは水面から十センチメートル程度浮かんで静止した。

「乗ってみて」

茜は右の足先でヴスをつついてみたが、びくともしなかった。慎重に右足をヴスの上に乗せて体重をかけ、ついで左足も乗せた。多少足元が揺れるものの、茜は二本足でヴスの上に立った。

「やった！大成功！よし、そのままちょっと動かしてみよう」

「えっえっ」

万代の操作で、ヴスはゆっくり前に動き出し、茜の体は慣性力で後ろに引っ張られた。

「どう？」

茜が答えるより先に、激しい水しぶきとともに茜は水の中に落ちた。びしょ濡れの服で部屋棟に戻るまで、茜は万代に文句を言い続け、万代は満足げに聞き流した。

その日から、万代と茜によるヴスの調整が始まった。茜が何度挑戦しても、人を乗せた状態でのヴスの移動は、バランスが取れずうまくいかなかった。そこで万代は少し前から考えていた対策に方針を転換した。ヴスを床に見立てて、その上を歩くようにするのだ。三台のヴスが交互に歩行者の前方に出て足台になる。両足は常に二台のヴスの上に乗って、残り一台が前に出て、次の一步の足台になる格好だ。万代は三台のヴスが交互に入れ替わるプログラムを組んだが、最初は連携がうまくいかず、ヴス同士でぶつかったり、間隔が

一定せずに、器用な茜でも歩行のタイミングを合わせられなかった。茜はドタバタ喜劇のように何度も何度もプールに落ちた。季節は梅雨に入っていたが、「濡れるのは一緒だから」という万代の一言で、雨の日も連日、ヴスの調整は続けられた。

ヴスの当座の調整目標は、五十メートルプールの縦断に設定された。半分までは、茜がどうにか体のバランスを取りながら到達できたが、そこから先が伸び悩んでいた。

しかし、ある日、茜は最初の一步を踏み出した瞬間に、いつもと違う感触に気付いた。足にヴスが吸い付いてくるような感覚だった。二歩三歩と歩を進め、茜の抱いた印象は確信に変わった。いける。プールの半分を過ぎても姿勢は安定したままで、茜は軽やかにプールの端まで歩ききった。

「万代さん！」
二人は駆け寄って抱き合い、茜は感極まって、そしてこれまでの恨みつらみを込めて、万代をプールに投げ入れた。

服が乾ききらないうちに、二人は行きつけのファミレスで祝杯を上げた。そこで万代は、ここ一週間ほどほとんど寝ずに、ヴスの制御プログラムを全面的に書き直し、茜の歩行の癖に合わせたことを打ち明けた。「万代さんはいちいち秘密主義なんだよな」と茜が思っているところに、万代は茜が思ってもみなかったことを口にした。

「次は、琵琶湖の横断をやるよ」
怪訝な顔をする茜に、万代は興奮しながら説明する。万代が工作部に入部したのは、テレビで見た自作飛行機コンテストに憧れたからで、その舞台はいつも琵琶湖なのだという。「琵琶湖、横断」と反芻しながら、茜は紗英のポストカードがふっと頭に浮かんだ。茜は思わず膝を叩いた。

「万代さん、津軽海峡はどうですか？」
「演歌が好きなの？知らなかったわ」

茜はそれに構わずオーシャンズセブンの説明を始め、話は勢いに乗って、紗英、水泳、受験、さらにはお気に入りのモンステラを捨ててしまったことまで話した。万代は黙って何度も頷いていたが、茜の手を取って言った。

「よし、アカネの夢に乗った！今日から本気の青春だよ！」

翌日、茜が部屋に行くと、小さなモンステラの鉢植えがあった。

「世話はよろしく」

「まかせてください！」

茜は元気に返事をした。そして二人は津軽海峡横断に向けて、詳細な計画を練り始めた。

横断ルートはいくつかあるが、青森県の龍飛崎を出発して、北海道の白神岬を目指す最短ルート、距離約二十キロメートルに決めた。

プールでは時速四キロメートルのヴス歩行が可能だが、波や風の影響、連続歩行による疲労も考慮して、時速三キロメートルで計算した。さらに、三十分一回のヴスのバッテリー交換も勘案し、所要時間を七時間と見込んだ。夏の北海道の日没は、午後七時頃。朝八時に出発すれば、十分余裕をもって、午後三時には横断し終える計算になる。

一番の問題は天候だった。万が一の水難を考えると、横断は水温の高い七月から九月に限られる。しかし、七月前半では梅雨が明けない可能性があり、八月以降になると台風シーズンが到来する。二人は決行日を七月最終の土日にして、準備を開始した。

しかし、すぐに思わぬ問題が生じた。横断時の安全確保のために、漁協の協力が不可欠であったが、調整が難航した。一ヶ月近く経っても返事はなかった。船とも飛行機ともつかない小型水上機の扱いを決めかねているようだった。七月下旬に入っても、漁協からの音沙汰はなく、茜がとうとうしびれを切らした。

「いつそ琵琶湖に戻しませんか？」

茜の弱気な提案を、万代は即座に却下し、往年の仁侠映画のように見栄を切った。

「そろそろ、アカネに工作部の底力を見せてあげる」

三日後、青森県の漁協から許可が下りた。万代が工作部のコネを使って話をまとめたのだ。漁協からは八月の第一週末を指定され、電話で「横断中に不具合が生じたら即座に中止」と耳にタコがからみつくほど念を押された。

準備は順調に進み、当日の伴走に使う二馬力船の操縦訓練をしたり、近くの海でヴスの海上歩行訓練を進めたが、出発の一週間前、最も危惧していたことが起きた。台風五号が発生したのだ。台風は勢力を保ったまま北上を続けており、決行日に津軽海峡に接近する公算が高くなっていた。台風で海が荒れたら計画中止は必至だ。茜は天気予報の確認を行いながらモニスタラの手入れをしていたので、剪定できる葉はすぐになくなってしまった。茜の不安をよそに、万代はむしろ開き直っていた。

「ここまでくると、キャンセルしてもお金は戻らない」

万代は、ヴス本体と部品や工具を宅配便で先に青森の宿に送った。決行二日前、茜と万代はすっかりスリムになったモニスタラに見送られ、東京からの夜行バスで青森に出発した。風音や車窓を叩く雨音は続き、それに合わせて茜の気持ちはどんどん重くなり、とても眠れそうになかった。隣の万代に目をやると、さすがに疲れが溜まっているのか、すでに深い眠りに落ちていた。

夜が明けて、青森市にバスが着いたときには、雨は嘘のように上がっていた。台風は速度を上げて、東の海上に抜けていた。二人は

ホッと胸をなで下ろして夜行バスを下りた。台風一過の快晴の中、青森駅から電車とバスを乗り継ぎ、龍飛崎に着いたときには正午を過ぎていた。

宿に着いて宅配便の段ボール箱を開けた瞬間、二人は真っ青になった。段ボール箱の中はそこに台風が通った後のように部品が散乱していた。プロペラなど衝撃に弱いものを本体から取り外して小箱にまとめたのが裏目に出た。小箱の蓋が途中で外れたのだ。万代は安物の小箱に向かって説教をしながら点検を始めた。機体の点検は構造を熟知した万代にしかできない。万代は茜に下見をしてくるよう声をかけた。

茜が宿を出ると、すぐ目の前に海が見えた。空は雲一つなく晴れ渡り、遠くに白神岬が見えた。気持ちのいい景色に気合が入ったが、海を見ていると吸い込まれそうな深い青に「大丈夫？」と聞かれて、海を抜けてきて、かえって不安が大きくなった。

機体の点検は夜までかかったが、プロペラ一本が破損していただけで、予備の部品交換で解決した。二人は新鮮な海鮮の夕食で一息つき、食べ終えると早めに床に就いた。万代はすぐに寝息を立てたが、茜はこの日もなかなか寝付けなかった。

翌朝、茜は目覚ましに反応してすぐに起き上がったが、万代はなかなか布団から出てこなかった。茜は「しかたないなあ」と言いながら、闘牛士のように万代の布団をめくり、思わず息を飲んだ。万代は額に大汗をかき、体に触れるまでもなく熱を出しているのがわかった。

「万代さん！」

万代は寝ぼけた口調で、「大丈夫、ちょっと疲れただけ。薬もあるから」とバッグの中を探り始めたが、動きは明らかに鈍かった。茜は万代のバッグをひったくり、薬の袋を探し出して、万代に飲ませた。

「私が準備します。ギリギリまで寝てください」

万代は布団に吸い込まれるように、また横になった。横断開始の予定時間まで、あと一時間半。茜は部屋に散乱した工具や部品を急いで片付け始めた。このまま万代さんが起きなかったら。茜はゴクリと唾を飲んだ。

荷物を積んだ台車をけたたましく押しながら茜が港に着いたのは、約束の十分前だった。薬が効いて起き上がれるようになった万代が、おぼつかない足取りで茜の後ろをついてきた。漁協の人はすでに港で待っていた。いかにも海の男らしく、体つきががっしりとした、日に焼けた四十代の船長だった。船長は開口一番、「なんかあれば、すぐに中止して船さ乗ら」と、有無を言わさない凄みで言った。

「もちろんです」と万代は熱でぼやけた頭で、一切ひるむことなく答えた。

「それがら、時間は午後四時まで。それ以降は中止」

予想外の船長の言葉に、茜と万代は思わず顔を見合わせた。

「日没までやらせてもらえないんですか？」

「日暮れ間際になんかありや、手も足も出ねはんで、ダメだ」

船長の主張はもつともで、二人は返す言葉がなかった。計算では到着予定時刻は午後三時。一時間以上のトラブルが発生したら継続は危うくなる。万代は茜に「がんばろう」と声をかけて、船長と細かい打ち合わせを始めた。茜はウエットスーツに着替えて、ライフジャケットをつけ、身支度を整えた。

万代は先に二馬力船で十メートルほど沖に出て、茜を待った。茜はヴスのスイッチを入れ、海に浮かべた。ヴスは波に小さく揺れていた。空を仰ぎ見る。夏の空だった。暑い一日になりそうだと茜は思った。茜は万代に大きく手を振って、開始の合図を送った。

「行きます！」

茜は最初の一步を踏み出した。右足。ヴスはしつかりと茜を支えた。五六歩、確かめるように慎重に進んでから、茜はいつものペースで歩き始めた。万代は茜の後方数メートルの距離で伴走を始め、さらにその後を船長の船がつけた。

沖合では波が少し出て、何度か体でバランスをとることもあったが、総じてヴスの動作は安定していた。三十分が経過し、最初のバッテリー交換。万代が至近距離まで近づいて、茜にバッテリーを手渡した。

「その調子。いいペースで来てる」

茜は太陽の日差しをそのまま反射したような満面の笑みで、万代にガッツポーズを見せた。

出発から一時間が経過し、茜は予定よりも順調に、二時間で七キロメートル進んだ。前方の白神岬は、輪郭がより明瞭になっていた。いける。茜がそう思った瞬間、足元のヴスから異音がした。慌てて止まり、万代に身振りで緊急信号を送った。茜の鼓動が早くなる。万代の二馬力船が急接近し、ヴスを回収した。ざっと確認した万代の表情が陰しくなった。プロペラが破損していたのだ。昨晩見落としたのかも点検することにした。万代は安全を取って、横断を一時中止し、他のヴスも点検することにした。万代は船長の船に移り、船長が口を開くより先に、「これはただの点検ですから」と釘を刺した。作業をする万代の手元はおぼつかなかった。船が揺れ、万代の顔色はいつでも血の気を失っていた。茜は傍らで万代の作業を見ていたが、いてもたってもいられず、海に飛び込んだ。水面に浮かんだり、気分

転換に軽く泳いだりしているうちに、茜は落ち着きを取り戻した。作業終了まで一時間を要した。

「プロペラを一本交換した。また変な音がしたらすぐに教えて」

茜は力強く頷いた。午前十一時、残り十三キロメートル。これ以上の遅れは許されぬ。茜は顔を両手で叩いて、自分に喝を入れた。真夏の日差しが容赦なく茜の体に降り注ぎ、茜はバッテリー交換に合わせて水分補給を欠かさなかった。海は全体的に穏やかだが、公海領域に出て大型船が近くを往来するようになり、茜は何度か立ち止まって、大型船からの波をやり過した。

午後一時。残り七キロメートル。順調に来ていた。あと三時間残っているが、万が一のトラブルに備えて、茜は少しペースを上げることにした。そこで突然、後方スピーカーから船長の怒声がした。茜があわてて振り返ると、万代が二馬力船で倒れていた。船長はすぐに茜を船に引き上げた。

「中止！中止せねば」

宣言する船長に、万代は焦点の定まらない目で食ってかかった。「ちよつと船酔いしただけです。休めば治ります。ちよつど昼食休憩の時間ですから、それで治ります」

船長はしばらく渋い顔をしていたが、「ほだば、休んでダメだば、中止だっきゃの」と船室に引き上げた。万代の顔色は、朝の時点よりも明らかに悪くなっていた。

「万代さん、顔色がおかしいです。もう中止にしましょう」

「絶対ダメ」

万代は歯を食いしばって、絞り出すように言った。

「これは茜だけの横断じゃない。私の横断でもあるの」

茜は胸倉をつかまれたような気分で、もう何も言えなくなった。自分でできるのは、ペースを上げて、少しでも早く海峡を横断することだ。茜は小声で悲鳴を上げ始めた全身の筋肉を、なだめるように入念にストレッチした。

午後二時。万代の顔色は多少赤味が戻っていた。船長は頭をかきむしって、出かかった言葉を飲み込んで続行を認めた。残り二時間で、七キロメートル。茜と万代は目で確認しあった。絶対に渡りきる。茜は時速四キロメートルに迫るペースで進んだ。波が高くなり、岩場を進むような足元の悪さで、ヴスは床というより階段のようだった。茜は肩で息をするようになった。

午後三時。残り三キロメートルまでに来ていた。このまま行けば、制限時間内にゴールできる。茜はホッと一息をついた。午後の日差しはさらに強くなっていて、茜の体は汗でびっしょり濡れ、足は水中を歩く時のように鈍く重かった。大型船を一隻やり過ぎた後で、再び歩き始めた茜は、不意に足を踏み外して、海に落ちた。茜は何

が起きたか分からなかった。万代があわてて二馬力船を寄せると、ヴスは煙を上げ、火傷しそうなほど熱くなっていた。オーバーヒートだ。茜は天を仰ぎ見た。万代は難しい顔のまま、自分に言い聞かせるような口調で言った。

「熱で回路が焼き切れていたら終わりだけど、三十分、冷やして様子を見る」

万代は船長に交渉をし、午後四時の時点で、岬まで一キロメートル以内になれば最後まで継続してもいいという約束を取り付けた。茜は脚や腕を丹念にマッサージしたり、ストレッチをしながら、祈り続けた。

どうか、もう一回動いて。

午後三時半。万代がヴスの電源スイッチを押す。万代と茜、そして船長の視線がヴスに集まる。ヴスの駆動音が耳に響いて、二人は思わず抱き合った。そして、すぐに険しい表情に戻った。あと三分で二キロメートルを歩ききらなければならない。茜はこわばる全身の筋肉を渾身の力で抑えつけて、歩を早めた。波が寄せ、足元が揺れる。万代の二馬力船は茜との距離を縮め、声をからして声援を送った。

午後四時。船長は何も言わず、親指を突き立てた。ちょうど岬まで一キロメートル。条件クリア。茜と万代は思わずハイタッチをした。最後のバッテリー交換をする。万代が茜にバッテリーを差し出し、それが茜と万代の手の間から滑り落ち、海に沈んだ。

「あー！」

二人は同時に声を上げた。茜は急いで海に飛び込んだ。すぐにバッテリーを回収したものの、バッテリーは使い物にならなくなっていた。手元にある残りのバッテリーはどれも充電されていない。万代は遠心分離機のように高速で脳を回転させた。

「三十分間、船の電源で急速充電すれば、なんとかなる」

万代が閃いた解決案を、船長は遮った。

「もう、あきらめへ」

茜も万代も俯いたまま顔を上げることができなかった。ここに来てたのに。せつかくここまですり着いたのに。

万代は必死に涙をこらえていた。茜も一緒だった。悔しくて、腹立たしかった。茜は渦巻く感情に体の置き場を見い出せず、ライフジャケットを脱いで、海に飛び込んだ。仰向けに水面に浮かんでいると、波が茜の体を上下にゆすり、波は感情のうねりを生み出した。水泳を投げ出した自分、受験を投げ出した自分。そして、今回の津軽海峡横断も中途半端に終わる。午後四時、太陽はまだ強く輝いていた。

「ここから泳ぎます！それなら文句ないでしょ」

茜は船長に向かって大声で宣言して、白神岬へ向けて、泳ぎ始めた。

「そだからこだ、よけいにまいね」

船長は大声で茜を制したが、茜は水をかく手を止めなかった。万代は涙を流し、鼻をたらしながら、船長に頭を下げた。

「どうか、お願いします！」

船長は黙り込んだ。ややしばらくしてから、頭をかいて「しよあんめ。青春ば、まぶいきゃのお」と困ったように言った。万代は顔をくしゃくしゃにして船長に一礼し、二馬力船を繰って茜に追いつくと、野球のコーチャーのように腕をぐるぐる回した。

「アカネー、いけー、泳げ！」

万代の声は、泳ぎを続ける茜にも届いていた。

「リミッター外せ！いけーい！百二十パーセントの青春、見せられ！」

茜の体は夏の光をたっぷり吸い込んで、熱を帯びていた。久々に両腕でかく水は重かった。それは手応えのある重みだった。モンステラの大きな葉は、ぐんぐん水をかき分けて前に進んだ。気持ちいい。なんて気持ちいい。そう、紗英にもこの気持ちを伝えたい。陸に着いたら、紗英にポストカードを出そう。

前略 サエ、津軽海峡を歩いて横断しました（最後だけちよっと泳いだ）。私は今、夏の真ん中にいます。

(了)